

【ポスター発表】

クイーンズランド州の特別支援教育 — 教員への意識調査をもとに —

○ 追手門学院大学 栗山直子 (3197)

キーワード3つ：クイーンズランド、インクルーシブ教育、困難感

1. 研究目的

我が国では、平成 17 年の中央教育審議会答申「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」では、ノーマライゼーション理念の浸透、障害の多様化をふまえる一方で、特別支援学校については地域におけるセンター的機能を促進させる方針を打ち出した。これに伴い、特別支援に関わる教員には従来業務に加えて、地域と学校との橋渡し役としての特別支援教育コーディネーターの役割がある。特別支援教育担当者連絡会を設置し、コーディネーター同士の連携を強化するなどの取り組みが各地で始まっている。

オーストラリアでは特別支援教育としての取り組みの歴史は我が国よりも長く、今後の我が国の参考になる部分は多いと考える。本発表は兵庫県とクイーンズランド州での特別支援教育に携わる教員（常勤・非常勤）に対して、アンケート調査を行った。ただし、クイーンズランドと我が国では制度的にも異なっているため、単純に比較することはできない。あくまでも教員側の認識という視点から限定的に特別支援教員の業務領域、多忙感、困難感を考察したい。

2. 研究の視点および方法

調査期間は 2010 年 8 月～2011 年 6 月である。調査対象はクイーンズランド州の特別支援学校教員 21 名、兵庫県下の特別支援教員 41 名である。調査方法はアンケートによる留め置き調査である。

3. 倫理的配慮

本調査にあたっては、日本社会福祉学会倫理綱領にのっとり、個人情報保護を遵守し、質問項目を作成した。また回収後も大学個人研究室の鍵付きキャビネットにて保管している。

4. 研究結果

本アンケート調査では、教員の A 困難感、A'困難感理由、B 多忙感、B'多忙感理由、C 満足感、C'満足感理由を中心に、兵庫県・クイーンズランド州との比較研究を試みた。調査結果の詳細については当日報告する。

5. 考察

ヴィゴツキーは、子どもが地域の同年齢や異年齢の人々との相互作用の中で自らの実行可能な事や問題解決可能な範囲を「最近接発達領域」とし、日常生活の中でそうした体験を繰り返し行っていくことで、その「最近接発達領域を」徐々に広げていくと説明した(ヴィゴツキー,1970)。これは特別支援教育の実践における地域との共働の必要性を示唆している。1978年イギリス教育科学省(Department of Education and Science)のウオーノック報告により「特別なニーズ教育」(Special Needs Education)が提唱されて以来、オーストラリアでは従来の特殊教育(Special Education)からいち早く脱却してきた。その成果もあって、クイーンズランドでは地域でのサポート資源収集、関連機関とのコーディネートなど地域における連携サポートがとくに重視されていた。これは子どもの生活を生態学的視点に立ち、包括的に支援することのあらわれと見ることができる。

引用文献

ヴィゴツキー著,柴田義松訳『精神発達の理論』明治図書,1970

*本発表は追手門学院大学オーストラリア研究所から助成を得て行った2010-2011年度共同研究「クイーンズランドの特別支援教育一日豪比較を中心に」(研究代表者:栗山直子、共同研究者:ピーターデイビス、クリスティーナ・ヴァン・クライノード)の成果の一部である。